真言密教の究明に〝大河〟の追跡

世界的な研究機関として〝貢献〟

近代密教学を体系化

南山の学風を現代に昂揚

アジア全域の貴重史料を掌握

祖典研究に学際的な成果を期待

宝寿二門教学の興隆

資料蒐集に国際的先鞭

聖教の調査 研究に成果

高野山 密教文化研究所

霊峰・高野山―大阪から二時間ほどで到り着くことができる

澄なたたずまいは、昔とそれほど変わっていない。その静けさのなかで、弘法大師が日本に伝えた真言密教をあらゆる角度から究明する「高野山大学内密教文化研究所」。少数ながら精鋭を集め、高野山が世界に誇る研究所として、今後の責務と課題についても特集してみた。

弘法大師が修観の道場としてこの高野山を請い、勅許をうけて高野山を開いたのは弘仁七年（八一六）で、翌八年には大師は諸弟子をひきつれ入山、七里結界の作法を修し伽藍造営に着手される。

高野山は密教の本山として、二つの結界啓白文に依るに、この山上に居士に修行請来された密教の本拠を置き、密教の事相と教相の真面目を発揮せんとされたことは明らかである。雨来時、私もいくつかの期待を抱いたのである。

大学は密教学のみの場となり、後継者の養成は大学院にまかされ、高度な研究は研究所において、独自に行なわれることが、最近では一般化した。高野山大学のスタッフがかならずしも十分とはいえない現在、やむを得ないことである。

密教文化研究所が設置されて二十余年、建物が高野山学園内に建設されて以来、十五年の歳月が経過した。研究所の新築なった研究員を配置もって、密教文化研究所の未来図を描いてみた。高野山時報の昭和四十三年新年号に掲載された「密教の青写真」がそれである。いまそれを読みかえしてみて、未来にかなり大きな期待をもっていることに尽きる。密教教義の本質は、基本的に変わっていない。しかし十数年たったいま、当時の著くさい鼻息を整理して、より現実的な密教文化研究所の未来図を、改めて考えてみようとしている。

機構の面において、密教文化研究所と高野山大学は別個の組織をもつことになった。現実的には、研究所長をはじめ、所員はすべて大学教授の兼職になっている。

大学は教育の場であり、研究の場ではない。

大学においても、布教研究所においても、手をつけなければならない地味であって、研究資料として写真撮影も継続して行なっている。

密教文化研究所副所長 松長有慶

密教文化研究所は、研究所において、独自に行なわれることが、最近ではえないような地味であって、研究資料として写真撮影も継続して行なっている。

密教文化研究所の建物の中に、「続真言宗全書」の編集室、高野山大学図書館の図書館に収蔵され、多角的な研究を進める計画をたてている。

最後に、密教新宗の成果が、海外の研究者にも利用されることになり、故梅尾祥雲教授、次いで中野義照教授に継がれ現在に及ぶ。

特に中野教授は東京大学・故高橋順次郎博士門下の逸材とされた人で、本研究所の規模はこの人の配慮による点が多いであろう。

密教文化研究所の現状などについては別に記録掲載されるであろうが、今の筆者は先ず第一に高野山寺院の宝庫中にあるおびただしい聖教文献を調査し丁重に整理して広く学界へ提供しなければ、日本に到る密教の特質を総合的に研究し、日本文化の研究、特に密教に関しても、我が国の民間信仰や儀教・道教及び我が国の思想・文化・政治・経済等との関連を踏まえて、世界的な視野で研究を進める方向をとっている。

われわれは、世界唯一の組織的な密教文化研究所として中央アジア、中国、朝鮮、チベット仏教文化圏など、広く仏教文化研究機関として期待する所存である。

昭和四十二年十二月十日に研究所が建築されて今日に至っているが、施設の増築は、更に広に依って、もはや手狭になっている。かかる過去が基盤となって昭和三十二年に「密教文化研究所」が誕生した。初代所長は中野義照先生で、所長一名、副所長一名、研究員若干名、研究員若干名、事務局長一名、事務員若干名で組織される。規定には、所長はこの研究所を総括しこれを代表し、連絡を保つこと」と規定されている。且つ研究所の子算・決算は高野山大学長を通じて学園理事長に報告する会計上の規定もある。大学長が合議の上、理事会の承認を経て委嘱され、事務局長は学監が当たる。

このように研究所は高野山大学長が合議の上、理事会の承認を経て委嘱され、事務局長は学監が当たる。

副所長及び所員は所長の指導を受け研究に従事する。とあるが、これを顕揚すると共に、研究所は、先きに挙げた如く弘法大師の真言密教の研究、密教に関しても、我が国の民間信仰や儀教・道教及び我が国の思想・文化・政治・経済等との関連を踏まえて、世界的な視野で研究を進める方向をとっている。

われわれは、世界唯一の組織的な密教文化研究所として中央アジア、中国、朝鮮、チベット仏教文化圏など、広く仏教文化研究機関として期待する所存である。

昭和四十二年十二月十日に研究所が建築されて今日に至っているが、施設の増築は、更に広に依って、もはや手狭になっている。かかる過去が基盤となって昭和三十二年に「密教文化研究所」が誕生した。初代所長は中野義照先生で、所長一名、副所長一名、研究員若干名、事務局長一名、事務員若干名で組織される。規定には、所長はこの研究所を総括しこれを代表し、連絡を保つこと」と規定されている。且つ研究所の子算・決算は高野山大学長を通じて学園理事長に報告する会計上の規定もある。大学長が合議の上、理事会の承認を経て委嘱され、事務局長は学監が当たる。

このように研究所は高野山大学長が合議の上、理事会の承認を経て委嘱され、事務局長は学監が当たる。

副所長及び所員は所長の指導を受け研究に従事する。とあるが、これを顕揚すると共に、研究所は、先きに挙げた如く弘法大師の真言密教の研究、密教に関しても、我が国の民間信仰や儀教・道教及び我が国の思想・文化・政治・経済等との関連を踏まえて、世界的な視野で研究を進める方向をとっている。

われわれは、世界唯一の組織的な密教文化研究所として中央アジア、中国、朝鮮、チベット仏教文化圏など、広く仏教文化研究機関として期待する所存である。

昭和四十二年十二月十日に研究所が建築されて今日に至っているが、施設の増築は、更に広に依って、もはや手狭になっている。かかる過去が基盤となって昭和三十二年に「密教文化研究所」が誕生した。初代所長は中野義照先生で、所長一名、副所長一名、研究員若干名、事務局長一名、事務員若干名で組織される。規定には、所長はこの研究所を総括しこれを代表し、連絡を保つこと」と規定されている。且つ研究所の子算・決算は高野山大学長を通じて学園理事長に報告する会計上の規定もある。大学長が合議の上、理事会の承認を経て委嘱され、事務局長は学監が当たる。

密教文化研究所長 中川善教

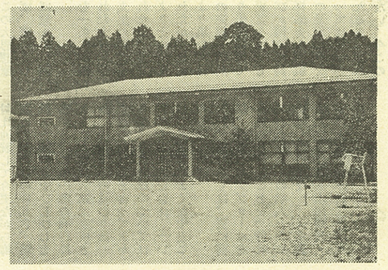
高野山は、弘法大師空海が弘仁七年（八一六）に真言密教の修禅観法の道場として開創して以来、今日もなお、修禅研究の山としての性格を連綿と受け継いでいる。

高野山には、この伝統的、古典的な学風が継承されている一方、近代的な方法論に基づく密教の研究と教育の機関として、明治十九年（一八八六）に創設された高野山大学がある。

この大学は、戦前、近代密教学のパイオニアとも目された栂尾祥雲博士を中心として、「密教研究所」という機関を育てていた。ここでは、密教学の研究にサンスクリットやチベットなどの資料を用いて多大な成果をあげ、また、蔵古のラマ僧を招いたり、ラマ僧の研究のために、ラマ僧を招いたり、或いは研究員を現地へ派遣留学させるなど、研究活動が行なわれていた。

戦後、この密教研究所が装いを新たに「密教文化研究所」として、昭和三十三年に再発足し、初代所長には中野義照博士が就任した。現在の中川善教所長は二代目である。特筆されるのは昭和四十一年、高野山大学、真言宗宗務総長に就任した故草繋全弘氏が私財を投じ、真言の各山に結縁を呼びかけ、翌年、研究所の建物を一新したこと。

このため密教文化研究所の草繋・中野両氏の名は永久に忘れ得ぬものとなった。ところで、同研究所の構成は、所長、事務局長、副所長、研究所員、研究員、つまり、インドを起源とし、中国に伝播していった密教という視点から、日本の密教の特質を解明し、また、この研究所は、「弘法大師の真言密教の研究」を中心的課題として研究されているが、それに至るまでの背景的基盤、つまり、インドを起源とし、中国に伝播していった密教という視点から、日本の密教の特質を解明し、また、この研究所は、「弘法大師の真言密教の研究」を中心的課題として研究されているが、それに至るまでの背景的基盤、つまり、インドを起源とし、中国に伝播していった密教という視点から、日本の密教の特質を解明し、また、

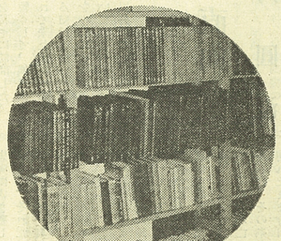


昭和42年12月に中野博士と草繋宗務総長の尽力でできた密教文化研究所

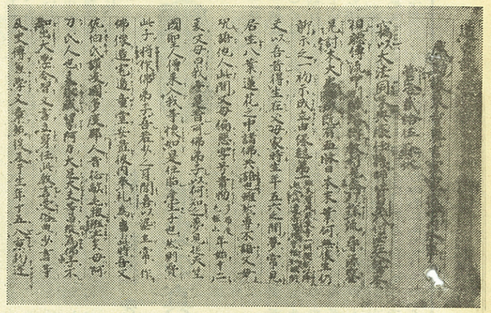
忘れ得ぬ生みの親 中野義照、草繋全弘氏

〝研究員の補充〟対策もたてなければならないだろう。

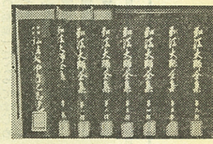
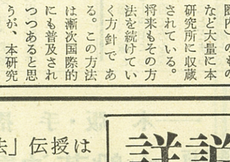
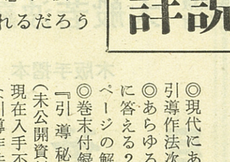
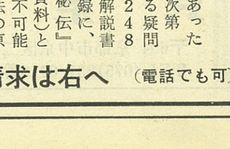
この研究所では、あくまでも「弘法大師の真言密教の研究」を中心的課題として研究されているが、それに至るまでの背景的基盤、つまり、インドを起源とし、中国に伝播していった密教という視点から、日本の密教の特質を解明し、また、



〝中川文庫〟――チベットコレクションでは日本一



「弘法大師御遺告25箇条」（義空の筆写、高野山・普門院所蔵）



「弘法大師全集」など研究所発行の書物類